



新教育における指導について——(三)

—— 幼兒指導要録の基礎としての指導 ——

文部事務官 玉 越 三 郎

四 指導の基礎

1 個人差

指導がおのおのの幼兒を最もふさわしい形で發達させるために加えられる助力にあるとすると、教師がまず研究し確認しておかなければならない基本的な問題に個人差と豫見とがある。それに指導が教師と幼兒との直接の解決であることから教師の教養は指導に大きな關係をもつてくる。

新しい教育における個別化の要求は、個人差の肯定にあることはゆるぎでもない。個性を尊重するとは、教師が幼兒の集團を對象として共通の項目を指導する場合も、その對象を個人において、その個人個人の幸福と幼兒が將來人間として有用な人物となることができるように、必要なときに必要な程度に、幼兒も一個の人格者として懇切に助力を與えることにほかならない。教師がこの責任を果すためには、先ず各幼兒の個性——個人差——について知つておく必要がある。

幼兒はその各々のもつ能力、興味、要求などによつて個人としての行動を左右しているばかりでなく、社會的な在方をも決定している。然もこれらの能力、興味、要求等は個人的にかなり大きい差異があることは何人も認めるところである。この差異すなわち個人差の生起の原因を考えてみると、一般的には、遺傳と環境との兩因にあるといわれている。この遺傳による差異——先天的な可能性——は現在のところこれを直接明らかにすることは不可能であるが、實驗やテストや觀察を通して或程度知ることができると。たとえば特殊な能力や相對的な優劣や興味の方向や要求の多寡や全人格の差異等は或程度は一應明らかにすることができると。つぎの環境による差異——後天的な可能性——すなわち生育條件はわりあい調査に困難を感じないと思はれるが、しかしこれは先天的可能性が明確にならないかぎり、果してこれが環境によるものであるか、或るいは遺傳によるものであるか、判定に苦しむことが多い。ともあれ幼兒指導の上から我々がここに問題

として考えなければならぬことは、幼児のどの特性がより環境によつてあり、どの特性がより遺傳によつているかとゆう點であつて、これが遺傳でありこれが環境であると決定する必要はないと思う。なぜならば幼児の指導上にも、幼児を理解する上にもその幼児の精神上身體上の特性傾向さえ明瞭になればそれについての指導の方向が確定できるからである。たとえば、この特性はより環境によつているから、このような環境の變化をもつて指導できる可能性があるとか、この特性はより遺傳に依存しているところが多いからここまででは指導できる可能性があるがそれ以上は困難であると或程度判断することができるところである。

2 豫見

幼兒はことに個人差が甚だしいと同時に、きわめて個人的にも社會的にも未發達未成熟であることは指導上大きな意味をもち、指導の重要性もここに考えられるのである。なぜならば指導が瞬間的な思いつきのものではなく継続的計畫的なものである以上、各々の幼兒が月日のすすむにつれて身體的にも精神的にも社會的にも機能は分化し複雑になり、社會的接觸面も大きくなり、その中に個人差を示してそれぞれ固有の姿を形成してゆくのであるから、その各々の幼兒の發達の状態を觀察研究してその幼兒が將來どのような姿になるであろうかとの見通しをつけ、五年後十年後この幼兒はこうなつてゆくであろうとゆう、出來うる限り正確な豫見の下に継続的な指導をする必要に迫られる。

ここに各幼兒の成長發達に對する教師のより正確な豫見が重要となつてくる。幼兒はきわめて未成熟未發達であるから、その成長發達に對する正確な豫見はそれ自體きわめて困難なことであるが、しかし、全く不可能であるとはいえない。継続した教師の觀察、調査研究によつて或程度正確に豫見できることは可能であり、これによつて價值ある指導ができるのである。教師はすべからず幼兒の成長發達に對する權威あるよき豫見者でなければならぬ。

3 教師の人格と教養

指導の主體が幼兒にあることは言うまでもないが、その活動に影響を興える最も大きいものは教師である。指導は理論でなく活動であり教師それ自體の行動にまつ助力であるから、その教師の人格と教養とは指導の實際に大きな影響を興えるばかりでなく、その指導の効果いかに規定する大きなかぎとなることはここにあらためてゆうまでもない。個人差の把握にしても、發達に對する豫見にしても、科學的調査方法の正確でない今日では、結局教師の判断にまたなければならぬ。その上よき指導の機會により適切な處置をとる者は必ず教師その人でなければならぬのであるから、その教師の圓滿な人格と廣く深く深いかつかたよらない教養と、更に専門的技術の優秀とは、指導上缺く事ができない要素である。

從來教師の指導者としての技術的な面は常に唱えられ、教師間でも永く研究されてきたところであるが、教師の人格と教養についてはとかく等閑にふされてきたうらみがある。わ

れわれは今後正しい指導のために、對象となる幼児の個性の理解と發達に對する豫見の正確を期すると共に、教師自からの人格の高潔と専門的教養はもちろん、一般的教養の廣くかつ深さをますためにも、たえず努力がはらわれるように注意しなければならぬ。ことに幼児は未發達なため、異つた要求も同一現象をもつてあらわすことが多く、これを教師の教養の淺さからその現象のみを觀察して、あやまつて同一要求として指導するようなことは、幼児にとつて障害となるばかりでなく幼児を思わない不幸に陥し入れることも少くないことを思わなければならぬ。なお教師のかたよつた人格や教養は、往々教師と幼児の「性格的な相違」との名の下に幼児を破滅に導く事のある事を深く反省する必要があると思う。

五 指導の方法と指導の場所

指導の方法としてその中心をなすものは、まず教師からみれば助言と助力とであり、幼児からみればその幼児全體すなわち「全體としての幼児」の活動なり經驗である。これをその幼児の發達段階の相違、程度、個性、時、場所等によつて如何に導くかが指導方法の根本であるが、同じ幼児に同一條件の下で同一の指導をしても同一の効果は決して得られないことがあるとゆうことを考えておかなければならない。

指導法の具體的な問題については、稿を改めて述べる機会もあると思われるので後にゆすることとするが、指導法の根本として注意しなければならぬことについて一、二述べて

みる。

その根本としてとりあげる問題は先ず對象となる各幼児の經驗及び活動と興味、要求、能力等の確實な把握にあることはゆうまでもないが、指導が繼續的計畫的な助言助力にある以上、教師は必ずそれを基礎として指導の目的を確立する必要がある。その指導の目的が確立してこそ指導の方法も考えられてくるのである。

次にその目的の下に充分研究され検討された指導計畫が立てられる必要がある。これは各々の幼児の成長發達にそくした、教師の正しい豫見の下に立案されたものでなければならぬ。この計畫には組としての集團指導はもちろん豫期される幼児の特別な指導についてもできる限り詳細に註記しておく必要がある。最も理想的には幼児一人一人の指導計畫が用意されることである。そしてその結果が指導要録に記入され、その結果が次の指導計畫を的確にし得られるようになることである。第三に、豫想した目的の下に立てられた指導計畫はあくまで豫定であつてこの計畫によつて幼児の指導を制約することは嚴にさけなければならないことである。計畫はあくまで計畫であつて、そこに豫定された指導法はあくまで豫定である。それは幼児の興味や要求は或程度豫見できるが的確に豫想できないところから起る矛盾であつて幼児を指導する上には往々起ることである。これを現實の幼児の要求や興味を無視して、豫定の計畫通り教師が指導するとゆうことはそれは全然指導ではなく教師の強要となるおそれがある

なお指導の方法としては、一齊指導、集團的指導、個別指導等があり、また積極的指導、消極的指導等も考えられ、さらに助言と助力等が考えられるが、これらの指導法はあくまでその指導の重點をどうみるかによつて、舉げられる方法であつて、現在小學校、中學校等で唱えられている指導法も數多くあるが、幼児指導においてはあくまで幼児の生活の中に示す事實について指導する生活指導（綜合指導）が根本であり分科的指導であつてはならず、また教師の行動によつて示す助力を主とした指導であり助言を副とする教師の身をもつて示す指導であることを忘れてはならない。

指導の場所についてはあまり述べられたことがないからここに少し述べてみる。場所についてもいろいろな分け方があるが、その一、二を考えてみると、

幼稚園における指導

この面の指導の方法はカリキュラムの内容と最も密接不可缺のものである。今日の教育はカリキュラムにしたがつて幼児の生活経験を豊富にして、個人的にも社會的にも調和のとれた心身の發達を圖ることを企圖しているものであるから、幼稚園における教育はすべてが指導であるといつてさしつかえない。たゞ現在の各幼稚園のカリキュラムには、指導の面の計畫が非常におろそかにされているから、今後のカリキュラムの計畫にあつてはこの點に注意しなければならぬ。望ましい幼稚園のカリキュラムは、幼児の生活経験を中心とした構成であり、その生活の中に繪畫も音楽も製作も綜合

されたものとして立案されたところの幼児の楽しい生活の経験の系統的な計畫でなければならぬ。それゆゑ計畫中には、一齊指導に對する點ばかりでなく幼児各人についての指導方法も記載されていることが必要であるが、それが不可能な場合には、少くともその計畫の下に行われる。實際指導にあつては教師は、一齊指導の中にも各幼児個々に注意して、指導することは忘つてはならない。

同じ音楽にしてもその受容できる可能性は各幼児によつて異なるのであるから、教師は一齊指導の中に各幼児のその要求の度合すなわち指導の度合を考慮して指導しなければならぬ。さらに新入園の幼児や身體的精神的な、缺陷や故障のある幼児や幼稚園を修了して小學校に入學する幼児等については特別な指導方法がとられる必要があることも考えられる（なお園外指導についても問題はありますがここには省略する）

家庭における指導

幼児の指導面は季節により家族の職業により教育の理解の程度によつて、各家庭において相當相違が見られるが、日曜日、休日、春夏冬の休暇は一般的に考えられなければならない。幼児がこれらの餘暇をどこでどのように過ごすかは指導上相當關心を持つ必要がある。幼児は幼稚園における生活時間より家庭における生活時間のほうが遙かに多いのであり、幼児の生活の中心はあくまで家庭であることを思うとき、家庭の生活は幼児の成長發達に重大な影響を及ぼす場所であることは何人も否定できない。それゆゑ各幼児を責任をもつて

指導する者にとつては、幼児の各家庭における生活についての關心と行動を注意深く研究調査する必要がある、その結果を基礎としてあらゆる方法を考究して家庭における指導をしなければならぬ。ことに家庭における指導は直接指導でなく、間接指導であり、先づ家庭の母を指導し密接な連絡の下に協力して指導する必要があるから、その指導方法については各幼児ごとに豫め充分研究しておいて、父母に指導方針を十二分に徹底させておく必要がある。これを不充分に行うとかえつて指導上障害となるような結果になるおそれがないとも限らない。これは夏季、冬季、春季の長期にわたる休暇において特にそうであるから、この期においては期間中何回か召集してその効果を検討して訂正してもらうか、教師自から各家庭を訪問してその効果を検討してさらに指導するようにするかしなければならない。

六 指導の基礎としての資料

指導の基礎として最も重要なことは、個人としての幼児すなわち、全人格としての幼児を理解し、幼児をとりまく家庭及び郷土社會を含む生活環境の實態を確實に把握することである。いかえれば幼児全體を正しく廣く理解することである。それには幼児について充分調査研究實驗してあらゆる資料を得る必要がある。幼児を正確に認識するための資料としてはいろいろ考えられるが、われわれが先ず考えなければならぬことは、如何にしたら個々の幼児の正しい姿が把握で

きるかとゆうことを、事實を中心としてたえず科學的方法によつて實驗—觀察—調査—研究して、幼児に關するあらゆる面にわたる事實についての生活記録を用意することにある。それには幼児の過去における身體的、知的、情緒的、社會的その他全人格に關する發達記録ばかりでなく、現在の狀態すなわち幼児が現に位置している境遇において全人格としてのありのままの姿を含む必要がある。これについては近く文部省から幼児指導要録が出される豫定であるから詳細については後の機會にゆずるとする。

この外幼児の成長發達に關係のあつた家庭環境の資料、社會環境の資料、學校記録、幼児日誌等はおもな資料としてあげることができる。

ここに注意しなければならないことはこれらの資料はあくまで幼児を指導するためのものであるから、無秩序にこれらの資料を集め又は記録するだけであつては、貴重な時間を空費するばかりで何の役にも立たなくなるおそれがあるから、これをよりよい資料とするために教師は指導目的の下によりよく整理整頓された有機的收集體となすよう、その方法を考究して充分活用し、これを記録のための記録として棚の上の置物としないように注意することが必要である。

七 指導の組織

確實な指導計畫及びその指導の實際は、教師一人またわ二人ぐらゐによつて成就するものではなく、周到に計畫され阻

織された人々によつて継続的組織的に研究が續けられて始めて成就するものである。本來指導は幼児の生活自體を離れては成立しないものであるから、幼稚園から家庭、社會における指導體系を確立しなければ眞の指導はできない。幼稚園と家庭とがその指導にுகிちがいがあれば指導の效果は期待できず、またあまり煩瑣な指導法であつても敬遠される。これがため幼児の發達段階と指導の目的とによつて幼稚園は家庭と社會との協力を得てここに有機的な關連をもつ指導組織を持ち、できうれば教師、父母、醫者、學識經驗者、心理學者等を含む指導委員會といつたようなものを組織して指導計畫を作成する諮問機關とし、また具體的な指導における各野の責任者を定めて、互いに連絡調整をはかる機關ともして、活用することができるような組織がもたれることが望ましい。なお幼稚園としての指導計畫や實行に關する全職員（組擔任教師は組以外の幼児の指導も積極的に當るような）や特に父母の積極的な参加、または活用については今後幼稚園として充分研究する必要がある。

この組織は一幼稚園ばかりでなく、同一地域内の幼稚園が相互に協力し或いはさらにこれを擴張した地域に及ぼし、園児のためによい指導の組織が確立されることが望ましい。

八 指導の評価

行爲に對する反省はすべて必要なことであるが、指導によつての結果の反省はそれを通しての進歩改善のためにも大き

な價值をもつものである。指導は先ずその目的が立てられ、この目的達成のために指導計畫が立てられ、それに適した種々の方法、組織が考えられて實際の指導が行なわれるのであるが、その計畫に對して實際行われた指導の結果がどうであつたか、果して所期の目的がはたされたか、指導計畫は妥當であつたか、指導の方法や組織はよかつたか、資料は充分研究されたものが準備されていつたか又幼児自身からはどんな反省をしたか等反省して速やかに次の指導に役立つように訂正する必要がある。そのうえ幼児それ自體が發達體であり、またその生活環境も常に進歩し變化しているのであるから、指導の目的、方法、組織等についてもそれに合致させるためには常に訂正し常に改善する必要に迫られてくる。

ことに幼児についての基本的資料についてはテストや父母の報告や教師の觀察の結果正しかつたかどうか、又幼児についての教師の豫見は正しかつたか、指導の方法は適切であつたか、幼稚園側の評價と家庭側の評價或いは社會のそれと一致していたかどうか等は、充分考究してこれを速やかに訂正する必要がある。これにもとずいて指導計畫を再検討して正しく立案しなおし常に幼児に適切な指導をするよう細心の注意を拂わなければ、幼児にとつて正しい指導といえなくないものである。なお評價は、幼児自身におこなはせる方法と幼稚園、家庭、社會のおこなう方法とがあるがこれらについては省略する。